

作文の書かせ方

指導要領に、「書くことのうち、作文を主とする学習は、計画的に指導し、各学年とも、年間最低授業時数の十分の一以上をこれにあてるようにする」と規定している。これについて、石井庄司先生は、「十分の一とは、例えば隔週に一時間ずつ作文の時間をもうけるというように、一つの固定した時間をとることをいうのではない、いろいろの場合、機会を捕えて、生徒の学習活動を主体に置いて、生徒の学習意欲に即した形で、しかも、計画的に指導することではないだろうか。」と述べ、具体的な案として、「一年三十五週だから十分の一とは十八時間になるが、その十八時間を、例えば毎学期六時間にわけ、その六時間のうちで、少なくとも一回ぐらい三、四時間の作文指導の時間として計画し、残りの時間は、読解あるいは聞く話す学習に即して、十分なり二十分なりをそれぞれとる。」と述べておられる。

このように、作文は、作文の単元として一定の時間をとり、また、まった作文指導をするともに、読解や話し聞く学習に即して書く

山 中 健 吉

ことの訓練をすることも必要である。

ところで石井先生は、「作文指導の時間として一定の時間をとり、その残りを読解、あるいは話し聞く学習と関連させてとる。」という具体案を示されているが、實際上、私達が現場において作文の指導をしてみても感じとしては、読解や話し聞くことに関連して書かせる方が、中学生は書くことに抵抗を感せず、また、それだけ生き生きとした立派なものを書いていく。そういう点から、「残りの時間を」という考え方でなく、むしろ、この方面にこそ、多くの時間をさき、計画的に作文指導をしていくよう考えてみたいものである。

このように考えてくると、作文を書かせる場合、ただ単に、生活作文を書かせたり、詩を作らせたり、手紙などの実用文を書かせたりすることで終始するのではなく、いろいろな書き方が工夫されるであろう。

では、どんな書かせ方があるか。私は次のようなことを考えてみ

1 観察を中心としたもの

(1) 見つけたままを書く——記録文、報告文などがこれにあたるだろう。どの教科書にも観察記録のせられている。これを利用して、事実を正確に書くとか、必要なことがらを落ちなく文章に書くなどの指導をし、夏休暇などの長期休暇を使って、記録を実際に書かせる指導は、従来から行なわれていることで、別に目新しいことではない。

(2) 見つけたこと感じたことを書く——私はこれを、文章による写生とよんでいる。生徒は上級に進むに従って、物を見つめないで、文章を書こうとする傾向がでてくる。その為でき上がって来たものは、あまりにも類型的であり、概念的であって面白味が見られない。そこで、もっとじっくりと物を見つめ、見つめたままをその通りのことば（自分のことば）で表現させることが必要なのではないか。作文を書く場合、まず第一に大切なのは対象物をしっかり眺める態度である。そこで、その訓練をしておきたい。

次の作品は、「水に住む虫」大町文衛（大書中一）の読解に関連してとり上げたものである。この教材は、いろいろな水生昆虫類の生態や形態の特異性を随想的に記述した文章であり、作者の虫に対する観察の細かな点が見られる。そこで、この作品を読んだあと、ものをじっくりみつめて見ると、平素見過しているありふれたものでも、いろいろかわって見えるものであるということを実際にあたって知り、ものを見つめることの大事さを経験させ、同時に、自分のことばで書くということがど

んなことかを知らせたいと考えたのである。時間は一時間。手順として、学校の校庭にはえている木の葉を取って来させ、それを机上において、いろいろの角度から見つめさせ、みつめている時、わかったこと、感じたことをそのままのことば（ただ単に、美しいとか、青いとかいうことばでなく、もっと具体的なことば）で箇条書きさせ、そのあと、文章としてまとめて原稿用紙に書かせたものである。生徒の生き生きとした鋭い感覚が知られ、とても楽しかった。

（具体例1）木の葉

一年女子

形は六つに分かれ、まわりにやわらかいとげのようなものがある。

色はきみどり全体のところに、緑がまだらにむらがっている。六つに分かれたところに、一つずつ太い脈、その先から互いにむかいあって無数の脈がでている。

ちぎると毛のようなものがたくさんでてくる。

まるで、キャンピングに行った時の夜に、みんなでたく火をひろげたような形だ。六つの指がある手ぶくろにも見える。色も緑、黄緑のところどころに茶色のはん点、黄色のはん点。まるで広い野原で、きれいな服を着たようせいがおどっているようだ。

表をさわると、つるつる（しかししねっとり）したようだが、裏は毛のようなものがあるためかゆくってしかたがない。どうしてこんなちがいがでてくるのだろうか。表が夏の服ならば、裏は冬の服になるだろう。

さて、こんどは脈を見よう。東京からでている鉄道のように。右はしから出ていくのが千葉などによく総武線、その上が常

盤線、そのまた上が東北本線、真上が上越線、その左横が信越線、その下が中央本線で、もう一つ下が東海道本線。これだけの鉄道が、日本の中心地「東京」に集ってくると同じように、この葉っぱも、葉の中心の軸に集ってきている。虫が一びき、ちようスピードで走っている。特急「こだま」のようだ。まわりにあるのこぎりの歯のようなぎざぎざのとげが、一枚のひんそうな葉っぱのアクセサリのようにについている。

葉を切断してみた。人間のように血は出ない。そのかわり、緑色のしるがでる。ほんのちよっぴりだが、この葉にはどれほどえいきようしただらうか。葉がしゃべらないかぎりわからない。

(具体例2) 木の葉

一年男子

上半分はビルマの寺にあるとう。

下半分は船の底。

船の底にぶら下がっている二つのかぶ……みつせん。

みつせんから、とうの先までまっすぐに葉脈の東海道線が走っている。

支線が、上むきに。60の方向に走っている。葉の上に行くにしたがつてその角度が大きくなっていく。

そして、支線の先がひらいてふん水になっている。

すかしてみると、鉄道のところはうすい緑になって、はっきりわかる。また、葉のふちもうすい。

とうの先は、かんなの刃がえりのようにうらへまがつている。

全体に右かた上がり。

葉のくき二本のくだがひつついてビニールコードのようだ。

葉の葉脈にも、人間の血管のように動脈と静脈とがあるのだから

うか？それとも片方ずつなのか、あすでも先生に聞いてみよう。

(3) 見つめたこと考えたこと感じたことを書く——生活作文などがこれにあたる。生活作文については、いまさら説明をするまでもないが、前記の「文章による写生」をよくやっておくと、「ありのままに書け」とか「思ったとおり見たとおりを書け」とか指導しなくてもすむ。中学生の作文で、最近よいものが減少してきたということであるが、「文章による写生」をよくやって後、生活作文を書かせるというのはどうだろうか。なお生活作文を書かせる場合は、なるべく自由題が望ましい。作品は省略する。

Ⅰ 思索を中心としたもの

(1) 作者の意図にそって考えて書く——生活的な作品だけでなく、上学年に進むに従って論理的な思考をさせる作品もどしどしくらせるようにしたい。それにはまず、論説文などを読んで、作者の述べていることを正しく受けとめることからはじめることである。例えば論説文の読解には入る前に、その文章の内容を四百字ぐらいでまとめさせる練習をするのである。(この場合、百字とか二百字では不適當) このよな書かせ方も作文の書かせ方の一つである。また、講演などの内容をメモさせ、あとから適當な枚数にまとめさせるのも、話し聞くことに関連した学習として考えられる。ただし、この書かせ方をする場合に字数を制限し、その限度で書かせるようにすることが望ましい。

次の作品は、「古典の道しるべ」福原麟太郎(大書中三)の読解には入る前に、四〇〇字の字数に限定して書かせたもので

ある。そのあと、文章読解には入り、読解後、要点がぬかすず述べられているか推敲させた。なお、はじめ四〇〇字以上で書き、あとから四〇〇字までしぼってまとめるよう注意を与えた。時間は約五〇分。この教材は、古典とはどういうものか、どんな読み方をすればよいか、さらに、日本の古典についてはどんな読み方が望ましいか、なぜ古典を読まねばならぬか、などについて書かれた文章である。

(具体例一) 古典の道しるべ

三年女子

古典は味わいつつかみしめて読むものである。では、古典とは一体何か。それは長い間読者があり、文学的価値を失わず後代に残されたもので、新しい文学を生み出す力となっているものである。「古事記・万葉集」は日本文学、ホーマーの「イリアッド」はヨーロッパ文学、「詩経」は中国文学の母胎として今なお尊敬されている。しかし、古典は古いものばかりではない。新しいものもある。読者の立場からいって、古代よりも新しいものから読み始める方がよい。古典は古いものを読む段になると言葉がむずかしい。ギリシャ、中国のもの等は翻訳でよいが、我国の古典だけは一部でよいから理解鑑賞の早道のためにも、ゆっくり原文で味わってもらいたい。また古典の古文体の持っている障害を振り捨て、現代英語に直すと断然おもしろくなる。自分達が祖先から受け継いだ古典を読み終えた心持は、格別のそう快さがある。シエークスピアでもゲーテでも、何かひとつ試みることが讚美の糸口である。

(具体例二) 古典の道しるべ

三年男子

古典というものは元来、古くかく、むずかしく、取っつきにくいものとされているが、深く味わって読んでいけばそう快な忘れ

がたいおもしろみを見いだすことができる。それに、古典は我々が昔から受けついで身近なものでもあるのだから、翻訳でもよいから読んでほしいものだ。まして、我が国の古典は、日本人である以上、一部分だけでも原文を味わって読んでほしい。たとえ、古いものでも、ゆっくり深く読めば直説で理解できるし、鑑賞の早道にもなる。

それに古典といっても幾百年もの古いものばかりでなく、一葉・漱石のような新しいものをもます。

つまり古典とは、長い間読者があり、文学価値を失わずして、後世にまで残り、それが新しい文学の先き駆けとなるのである。古典は昔から今日までの尊い遺産である。それだけに、我々はどんなものでも一つとにかく読んでみることである。それが讚美の糸口でもある。

(2) 一つの文章だけでなくいろいろな人の文章にふれ、それらの考えを材料として自分の考えをつくり上げて書く——一つの論説文の読解が終わった際、その問題に關した他の文章も読ませ、それらを適当に取捨選択して、自分の考えをつくり上げていくのである。「読者論」「幸福論」あるいは「国語に關する問題」などの文章は、どの教科書にものせられているので、それらを利用して書かせるとよい。この際どんな文章のどういふところを利用したかをあとで書き出させるようにするのがよい。

次の作品は、「読書法について」宮沢俊義・大内兵衛(大書中三)の読解後、一年の時に学習した教材「良書とは何か」出口一雄(日本書院中一)を参照させて書かせたものである。宮

沢氏は、中学時代、先生から聞いた、どんな本でも初めの百ページを丁寧に読めということ、だれにもあてはまる読書法はなく、読書法はその人その人によって異なるという二つのことを述べている。また、大内氏は、ドイツ人ベンチヒから教わった読書ノートをつくれという読書法と、新渡戸先生から教わった文章中にアンダーラインを引けという読書法を紹介している。出口氏は、読者の読み方によってよい本も悪くなり、悪い本もよくなるということ、読む場合には、目的を明かにして読めということ述べている。

(具体例) 読書のあり方

三年男子

読書の大切な要素として、次のようなことがあげられると思ふ。

一、読み方 二、本の選び方

以上二つである。

まず一について言えば、ぼくは小学校の先生にこういうことを教わった。「読み方において大きくわけるとすれば、多説と精説とがある。多説と精説とどちらがよいかということを考える人もあるが、そのことにはこだわらなくてもよい。多説と精説とは必要に応じて適する方を選ばよく、またあわせて用いることが、いちばん完全な読書法だ。」と。

ほくもこの意見には賛成だ。また「読書法について」では、初めの百ページを丁寧に読むという方法が紹介してある。そういうようなことを総合して考えていくと、読む方法には色々あるが、結局大切なことは、よく味わって読み、また、本によって読み方を考えなければならぬということである。そして、読書法

とは人によって変わってくるということである。

次に二の問題だが、これを考える時、読書の根本の目的から考えていかなければならないと思う。読書とは、自分の欲求を満たそうとすることが主な目的である。いつか忘れたが、テレビで「本を買う時、もう一度、自分の心を確かめ、その本が自分に一番適するものかを考えなさい。」ということ聞いた。これは前に述べたことをよく言い表わしていると思う。

こういうことから考えていくと、普通、よいと言われている本も、読み方、読む態度により悪書ともなり、反対に悪いといわれている本も、場合によっては良書ともなり得るものである。人によっては古典を選ばまぢがいないというが、たしかに古典はよいにはちがいない。しかし、人、ひとりひとりによって評判通りの感動を受けない場合も考えられ、古典を読んで理解することのできない人にとってはなおさらである。このような点から考えていくと、本を選ぶには読みたい人の目的にあったものを選ぶのが最大の良書となり、有意義なものとなり得るといふ結論に達する。

(3)自分の考えを述べる——論説文を書くのがこれである。いろいろな経験によってゆり動かされた自分の考えを徹底的に押し出すめ、思索を深めながらそれを文章として正確に書きとどめていくこと。それは上学年になるに従ってせひやる必要がある。「友情」「運命」「幸福」など日頃生徒達が切実に考えている問題について書かせることである。

これは最初、文章全体の構成を考え、どんなことをどんな順

序で書くかを決めさせた後、書かせる方法や、一応書かせておいて、その後自分の書いた文章を段落に切り、それぞれの節意を明かにしながら、自分の言いたいことが十分に書き表わされているか検討させる方法などが考えられよう。作品は省略。

II 心情を中心としたもの

(1) 作品を読んだあとの感想を書く——読後感想文などがこれにあたる。文学作品を読ませたあとは、なるべく感想文を書かせたいものである。ただし、いつも文章の推敲をさせたり、提出させたりする形をとらず、十名ずつぐらいのグループをくませ、回覧させ、お互いの間で批評をさせるやり方をとってみたい。

また、感想文の変形として、主人公に対する手紙とか、登場人物の一人だけに線をしばってその行動を批判してみるとか、各種の書き方が考えられる。また、そのような書き方は案外書きやすく、日頃読後感想文を書かされることに食傷気味の生徒でも、進んで書くこうとする傾向が見られる。

次にあげるのは、「坂道」壺井栄（光村中二）の教材を利用して三年生に作文させたものである。この教材はそのあと、作品の主題、構成の研究をやつた。内容は、両親を失った堂本青年が、父の友人でくずやをしている道子の一家にひきとられ、くずやをしながらそのうち大学に入学する。そして、道子の家が手狭で勉強するのに不向きのため近くに部屋を賃りて引っ越しをする。その引っ越しの途中の坂道でおこった事件をとり上げ、人間の生き方について問題を投げかけた作品である。

(具体例1) 堂本君へ

三年男子

君の歩む道は近くはない。「この道われを生かす道なり」と誰かの詩にある。真面目に働いて勉強すれば、きっといいことがあるにちがいない。道子の家族の人々は実にいい人ばかりだ。そして、貧乏でも明るく楽しく生活している。そうした知り合いを持つ君は幸せだ。がんばらなくてはならない。

これからの君の航海は、引越す時にイザコザがあったあの坂のように苦しい。上りも下りも苦しい。イザコザがあるかも知れない。だけどその先には幸福は待っている。きつと待っている。この坂道を、「なんだ坂」「こんな坂」——希望を失なわず一歩一歩歩もう。勉強しよう。君のあと押しを、ほら一夫たちがしている。君が「なんだ坂」とかけ声をかければ、みんなが「こんな坂」と答えるだろう。

(具体例2) おばあさんに対して 三年女子

あなたの言われたことやされたことの中で、私がふんがいたことはいくつもあります。黒犬をつないでおらず、黒犬が小犬にかみついた時も、止めようとはされなかった。それなのに堂本さんが、「黒犬を殺してもいいのよ。」と言った時には、「動物愛護週間」というものを持ち出して、いかにも私は動物をかわいがっているんだというようなそぶりをされました。それでは、あなたのいわれる動物愛護週間というのは、自分のものだけを愛護するという意味なのですか。同じ条件にある自分の犬と他の犬を前にして、よくもそんなことを言えたものですね。利己主義にもほどがあると思います。

あなたが、やっぱりだからという気持ちからでしょうか、畜生のことだからとあやまれた時、かっただと思いがらも、あや

まったということからあなたを許す気持ちになりました。けれども、「お葉代とでもおっしやるんですか。」と言われた時、貧乏人は金さえ与えれば身を引くと思っているその考え方に対して、ひどく腹が立ちました。あなたは、自分が金持ちなのだから、貧乏人には金で顔がきくと思っているんでしょうが、私には、あなたの、人間を金持ちか貧乏人かで差別をつける考え方は、だまって見のがすわけにはいきません。といつても、あなた私が言ったくらいで、簡単に考えをなおす人ではないでしょうが。

(2) 作品を材料にして創作をする——前記の感想文の変形の一つとも考えられるが、小説の鑑賞のあとで、そのつゞきを書かせてみたり、詩、短歌、俳句などの学習のあと、自分でその情景や気持ちを書きさらしに想像させ、自分のことばで表現させてみるのも面白い。特に俳句の鑑賞のあとではぜひ書かせてみたいものである。その態度がまた自分でも俳句を作ってみようという気持ちを起させるであろう。よく俳句などの学習のあと、俳句を作る作業を課すことがあるが、こんな作業も加えてみたいものである。

次の作品は、前述の「坂道」の後日談と、俳句鑑賞後の作文である。

(具体例1) 坂道 (後日談)

三年女子

太陽がかんかん照りつけ、額に汗がじつとりとにじんでくる。坂道の中ぐらいいまで来ると、私の家の前に人だかりがしているではないか。私は——どうしたのだろう——と不審な気持ちをし

だきながら家の前までくると、父と祖母が何かしきりにおまわりさんに言っているのである。みると、向こうの坂を身なりのよくない青年と子供達が登って行くのがみえた。私はその中の少女が一年下の道子さんではないかと思った。人々はその一行を見て何かささやきながら四方へ散っていった。おまわりさんも祖母に何か言って、「ああ、暑い、暑い。」といいながらハンケチで汗をふきふき坂を下っていった。いつもの愛らしいじんちようげの花だけが、人々の去っていった坂道にあいかわらず咲き誇っていた。

家に入った父は、「とんだ不良青年のために時間をむだにした。」といいながら二階へ上っていった。祖母の言うのには、「私が外で日なたばっこをしていると、なんだか人相の悪い人達が大人車を押し押し坂を上って行くところへ、うちのクロがほえたんだよ。あまり人相が悪いのでね。クロもよく知っているよ。するとね、その人ときたら大声で、『こんなにほえる犬は殺してやる。』と叫んだもんだから、私達が注意してやっただよ。ほんとうに近頃の青年はすぐ、殺すとかなんとかいって、いやだねえ。」と嘆息しました。私はその時、祖母に「またクロがすぐほえたんでしょう。どうして、おばあさん止めてあげなかつたの。だれだって、あんなにはえられると怒るわよ。」というのと、

「まあ、私も最初は止めようと思ったんだけど、あんまりその人の態度がよくないので腹がたつてね。」と言った。でもあの中に確かに道子さんがいたように思えたが。道子さんは一年下だけれど、その頭よきさと人格のすぐれているのは一級上の私達の学年まで伝わってくるほどだから、そんなことをする筈がない。私は

祖母の話がなんだか信じられないような気がした。

翌日、私は道子さんに一部始終を聞き出した。最初はためらっていた道子さんも、たのむとはつきりその時の様子を語ってくれた。クロがチビにかみついたこと。祖母がそれを見ていて止めなかつたこと。また父が不良青年といつていた人が、堂本さんという人で、くす屋をしながら学校へ通う偉い青年ということなど……。私はそれらを聞いている間、顔を上げることができなかつた。何とはずかしいことだろう。働きながら勉強しようとする青年の新しい門出の日に、父や祖母は何というはずかしいことをしたのだろう。商売に成功して裕福な生活をしている私達と、親がなくても一生懸命汗を流して、ためたお金で学校へ通おうとはげんでいる堂本さんと、一体どちらが偉いというのだろう。戦争直後、物のない時、手広く商売をしてもうけた父が、それまで貧しい生活をしてきたのが一度に繁盛し、こんなに裕福な生活が出来るようになったために、父や祖母の心までが貧乏人を低くみるように変わったことは、私にとって一番悲しいことなのだ。私達にとっては、あんなによいおとうさん、おばあさんなのに、どうしてみなのきたない人には冷たく当たるのだろうか。

私は道子さんにおわびをいい、堂本青年をばげましてくれるようにたのみ、道子さんと別れた。家に帰ってきょうこそは祖母や父に話そう。こんなりっぱな人を少なくともいやな気分にした父や祖母の考えを改めてもらおうように――。

家が見える坂道にさしかかった。昨日とちがいきよりは、涼しい風が吹き、夕やけが坂道を美しく染めていた。

(注)

黒犬のいる金持ちの家に子供がいることは作品上あらわれては
いないが、作者は、いたと想像し、その立場で書いたものであ
る。

(具体例2) 俳句の鑑賞

三年男子

永き日もさへずり足らぬひばりかな

太陽がのどかに野山を照らし、交烟にはかげろうがもえ、モン
シロチヨウの飛ぶ姿があたりにみえるのどかな春の風さがりて
す。

冬の寒さをじっとこらえ、この陽気な日の長い春のくるのをま
っていたかのように生物界は活動を始めています。みんな春のき
たのを喜んでいきます。春を楽しんでいます。ここで見ていても、
思わずうっとりとして、その美しさの中にひきこまれてしまいで
います。中でも天高く舞うひばりはとりわけこの春を楽しんでい
るようにみえます。父ひばり、母ひばり、子ひばり、すべてのひ
ばりが春は自分たちのものとはばかりに飛びまわっています。彼ら
は一日中ピイチク、パアチクと、大空を舞台にさえずりまくりま
す。あすも、そしてまた次の日も。

やがてひばりは空全体で大合唱を始めました。あれだけ鳴いて
もまだものたりないのでしょうか。すこし、あつかましいような
気もします。しかし今は春なのです。ひばりの天国なのです。彼
らも自分たちのうれしさを他のものに分け与えようとしているの
かも知れません。

ひばりよ鳴け鳴け、すべてのものにおもうぞんぶん春をすい込
ませるために。

ああ、ほんとうにすばらしい春の風さがりです。

(3) 創作をする——物語を書いたり、詩を作ったりするのである。

人間は一生のうち一度は自叙伝を書いてみたいという気持ちをもつという。そこで三年の終わりにあたって、自叙伝めいた私小説でも書かせてみるのはどうだろう。しかし、中学生ではあまりよいものを期待するのは無理である。一方、詩を作るといふ学習はよくなされている。いまさらこれについて説明するまでもないが、中学生の詩は頭で作ろうとする傾向があつて、生き生きとしたものが少ないことに注意しなければならぬ。よい詩を作らせるためには、もっとものを見る目、もっともの感じる心をつけるよう工夫をしなければならぬ。そこで一つの方法として、自分の書こうとする詩の中心の場面を絵に描いたり、その時の感情を音や動作にあらわしたあとで書かせるといふようなのはどうだろうか。私はまだ試みたことはないが、近くやってみたいと思つている。

以上、さまざまな作文の書かせ方を考えて実施してきたが、これ以外にもいろいろな方法があるであらう。

なんといっても、作文指導は生徒にどしどし書かせることが第一であるが、しかし書かせると言つても、いつも同じような書かせ方をしていては、生徒もおっくうがり、またそれにともなつて生新な作品が少なくなつていく。だから、「またか」といふ気分を生徒に持たさないために、教師はいろいろと工夫をこらすことが大切である。

また、書かせる場合には、書きたいという意欲を持たせないと、よいものは生まれて来ない。その点から文章読解や作品鑑賞、あるいは話し聞く学習と関連したものが、もっともと試みられねばな

らないと思う。

たゞ、どういう時に、どんな目的で、どんなものを書かせるかについて、その計画を年度初めにしっかりとたてておくことが肝要である。

作文に関しては、さらに具体的な指導や、評価などに関する大きな問題があるが、ここでは以上のように作文の書かせ方だけに問題をしばつて考えてみた。

(大阪学芸大学付属平野中学校教諭)